

## 《特別講演》

### 共感と比喩

#### 感情をめぐる言語の問題

グンター・ゲバウアー  
桑原俊介 訳

本稿で考察されるのは、自然科学や現象学の論文においては扱われないような、言語と感情の関係についての哲学的観念である。議論の端緒となるのは、L・ヴィトゲンシュタインが提示した哲学概念の分析と人間学的な観念である。本稿の最後で、わたし自身の立場を提示した上で、今後の研究予定を不完全ながらもお伝えしようと思う。そこで問題となるのは、本稿の考察を、日常言語や詩的言語における比喩に対して適用することである。

感情とはそれを抱く人物に固有のものである。感情は、ひとりの人間の個人的な心の動きに属するものであり、ゆえにそれは、本質的に、主体の固有性を構成するものに関わる。その一方で、他者の感情とは、われわれにとって、ある異質な精神の典型的な表現ないし典型的な振る舞い方以外の何ものでもない。分析哲学において、このような差異は、一人称命題 (Ich-Satz) と二人称命題 (Er-Satz) との非対称性として捉えられてきた。ゆえにここでは、自分自身の感情の状態は直接的

に捉えることができるが、他者の感情は直接的には捉えることができないと考えられてきた。

先ずわたしは、以下の二つの理由から、このような一人称と三人称との「非対称性」という主張が誤謬に繋がるものであることを示そうと思う。

(一) 感情とは一般的に直接的には認識され得ないが、このことは、感情を抱く当の「*Er*」にとっても同様である。L・ヴィトゲンシュタインが、いわゆる『私的言語論 (*PrL*)』において示したように、感情の把握や感情に関わる言語とは、語と対象に関わる「文法」とは異なる「文法」に従うものなのである。ゆえに、このような一人称命題を、他者に関わる命題と比較〔同一視〕することはできない。

(二) E・バンヴェニストによる人称代名詞理論によれば、*Ich*と*Er*とは対立するものではない。むしろ*Ich*と対立するのは*Du*である。*Ich*と*Du*とは、『言説 (*Diskurs*)』(つまり言語ゲーム (*Sprachspiel*)) においてシステムティックに関連し合う二つの位置〔Position 項〕なのである。*Ich*の位置は常に*Du*の位置をも暗示している。両者は交換可能な位置関係であり、両者ともに人称を表している。一方で*Er*という代名詞はまったく異なった仕方で機能する。つまり*Er*とは、決して人称を指示するものではない。むしろそれは、言説に不在であるがゆえに言説に関与するものを何もたない審級なのである (E・バンヴェニスト「」)。*Er*とは、*Ich*と*Du*との類推に基づいて構成されたものであり、*Ich*と*Du*は真正な代名詞であるが、*Er*とは単なる疑似的な代名詞 (*Pseudo-Pronomen*) に過ぎない。ゆえに、*Ich*と*Er*とを対置させることは誤りである。正しい対置は、*Ich*と*Du*との間でなされねばならない。

ゆえに正しい主張とは以下の通りである。感情を一人称命題によって捉える仕方と、感情を二人称命題によって捉える仕方は同一ではない。両命題が表現しているのは、感情に対する二つの異なる構え (*Einstellung*) なのである。このことを他どの哲学者よりも明晰に認識していたのはヴィトゲンシュタインである。

そこでわたしは、以下において、ヴィトゲンシュタインの見解を再構成した上で、彼の主張をさらに敷衍することを試み

たい。そのために、まずは「彼の」私的言語に関する議論を確認しておく必要がある。

『哲学探求』においてルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインは、内的現象を内観 (*Introspektion*) する可能性を批判した<sup>(3)</sup>。そのために彼は、議論の目的に応じて、ある(虚構の)言語を仮設した。その言語とは、ただひとりの人物によってのみ使用され理解され得るような言語である。彼はそれを「私的言語 (*Privatsprache*)」と名付けた。その言語の話し手と聞き手は同一人物であり、内的対象を指示するために適用されるべき規則を知っているのは、その人物だけなのである。このような私的言語によって表現される経験とは、その語り手だけが知ることのできるものである。そこでヴィトゲンシュタインが立てた問いとは、体験し話し理解するIchは、この規則を正しく適用できるのかどうか、というものである。

このような私的言語に対する反論の核心とは、内的規則に従うことなど不可能だとする考えにある。なぜなら、規則と規則の適用を心的に比較する際、その正当性の基準などどこにも存在し得ないからである。自分自身の内的経験において、正しいものと、わたしだけが正しいと見なすものとは、判別し難いものである。「(…)規則に従っていると信じること、規則に従うこととは、同じことなのではないか」(PU § 202)。ゆえに、自己固有の感情を、自身の内面において名指すことなど不可能なのである。ヴィトゲンシュタインはこのような議論から次のような結論を引き出す。感情の文法が、〈指示と対象〉というモデルに即して機能することなどあり得ない。ゆえに、自身の感情を、主体の内的知覚の客体と見なすなら、その人は、感情についての誤った記述をしていることになる。

哲学的思考の最終段階で、ヴィトゲンシュタインは、感情をめぐる言語ゲームの成立がどのように記述され得るのかと問うている<sup>(3)</sup>。そこで彼は、人間の生涯における最初の表現を、「原初的反応 (*primitive Reaktionen*)」(*Letzte Schriften I, § 54*)と呼ぶ。これらの反応は自然な原因に基づくものであり、ゆえにほとんどすべての人に類似した作用を引き起こす。極めて幼い子供にとって、これらの反応は文化的な刻印をほとんど受けておらず、年齢を積み重ねた後であっても、これらの

反応は完全には払拭され得ないものである。感情に関する言語を獲得するにあたり、これらの反応が極めて重要になるのは、それらが端的に把握され、容易に再認され得るものだからである。

感情表現の原初的な本性を論じるにあたり、ヴィトゲンシュタインは、「原初的反応」の前言語的性格を強調する。感情に関する言語ゲームの成立のモデルとして、彼は次のような場面を想定する。

感情を表す名称の意味を、ひとはどのようにして学ぶのだろうか？ 例えば「痛み」という語はどうか。ひとつの可能性として考えられるのは、感情に関する根源的で自然的な表現にある語が結びつき、その語がその表現の代わりとなることで、感情に関する語が生じてくるというものである。例えば、ある子供が怪我をし、叫び声をあげると、大人たちがその子供に語りかけ、驚嘆の声をあげ、それに対して何らかの文 (Sätzen) を与える。彼らはそれによって子供に、痛みに対する新しい対処法を教えているのである。(PU S 244)

このようにして子供は、「痛みに対する」ある特定の振る舞い方を学ぶと同時に、その新しい観察方法を学ぶ。ここで決定的に重要なのは、大人たちの反応である。大人たちは、子供が怪我をした様子を見て、子供が泣き叫ぶのを聞き、救護が必要だと判断すれば、子供を医者に連れてゆき、子供を慰める。感情に関する言語ゲームについてのヴィトゲンシュタインの思考にとって重要なのは、このような直接的な身体反応であり、そこには、痛みの叫びに対する驚きの声や、その最初の表現 (「痛い！」) も含まれる。しかも、そこでの根源的な感情の振る舞いの理解は、解釈や認知といった「知的」過程を経ずに生じるものである。われわれは、他者の感情的な振る舞いを解釈するのではなく、誰かが喜びや哀しみや怒りを感じているのを直接的に見て取る。私はこのような感情に対する構えを「関与的視角 (Teilhabeperspektive)」と名づけようと思う。

感情的な表現を学び知ることは、孤立した現象ではない。「痛み」という語の使用法を、そこに結びついた意味とともに把握した幼い子供は、そのほとんどが、すでに最初の痛みの経験を経ているものである。感情的な現象はすでに子供の生に織り込まれており、それはすでに子供の生の一部を構成している。だが、その段階ではまだ、子供の両親が「痛み」という語で指示するものは、子供には与えられていない。子供の中で何かが生じているが、それは依然として言語的な媒体によって捉えられていないのである。「それら〔感情〕は、何か (Etwas) ではない。しかしそれは無 (Nichts) でもない！」(Du § 304)。しかしながら子供の両親は、子供の振る舞いに関与する視角において採られるべき個人的な見本 (Muster) を認識している。この個人的な見本は、何度も繰り返されることで、一般的な見本に類似するようになった見本なのである。痛みの感情は、ある特定の仕方で、子供の生に帰属するものとなり、そこである特定の場所を占めるようになる。「〔では、その仕方とはどのようなものか?〕

ある子供が、原初的な反応によって痛みを表現する際、子供はそこに関与していない観察者と向き合っているのではなく、自分の両親と向き合っているのであり、子供は両親による関与を必要としている。その際両親は、我が子の訴えるような痛みの振る舞いそのものによって触発されている蓋然性が高い。ヴァイトゲンシュタインは『哲学探究』の中で、このような触発された状態を、ある事例に即して描写している。この事例は、感情の直接的な理解がどのように生じるのかを説明するのに格好の事例である。

ヴァイトゲンシュタインは、ある人物が市電に撥ねられて足を失った状況に居合わせた目撃者という場面を想定する。足を失い出血する人物と対面した目撃者にとって、負傷者の痛みは疑いようなものではないものである。ヴァイトゲンシュタインのこのような事例を、彼が負傷者の痛みの直接的な把握を承認したものとして理解することができる。まさにこの点に彼の記述の真

意がある。すなわち、意識的な行為による出来事の加工〔知的な把握〕など存在せず、状況の直接的な理解があるだけなのだ。

このようなヴィトゲンシュタインの事例をどのように理解することができるのか。私の解釈によれば、そこでは、事故と痛みの振る舞いに関わる全体的な印象そのものが、目撃者の中に強い反応を引き起こしている。目撃者は、負傷者と対面して関与の視角を発動させ、それ以外の何の介入もなしに、彼の苦しみを〔直接的に〕把握したのだ。目撃者は負傷者の痛みを持つのではなく、感情に襲われる——しかも、自分自身の感情に襲われるのだ。その感情は、出血して絶叫する人物の感情的な印象によって引き起こされ、彼の痛み中枢に近接した領野における神経生物学的な活性化によって引き起こされたものと推定される。ゆえにここでの問題は、同一化でも類推でもない。つまりここでは、苦しむ人物の位置に自らを置き入れるという心の動きが問題となっているのではない。またここでは、心的な構築や演繹が生じているのではない。むしろ目撃者は、この事故によって引き起こされた感情を、自分自身の身体において知覚しているだけなのである。むしろこの感情を、負傷者の苦しみと比較することはできない。だがここでは、生物学的な水準で、二人の人物の間に極めて類似した現象が生起していると想定することは許されよう。ヴィトゲンシュタインがこのような事例を通じて明らかにしているのは、人間の自然本性における感情現象は、生物学的なプロセスに基礎をもつということである。このような仮定はおそらく、主として、いわゆる基礎感情（J・パンクセップ）との関係で着想されたものだと言える<sup>(4)</sup>。

感情についての言語は、身体的な現象と関係している。この現象は、ある主体の環境ないしその主体の内的プロセスによって引き起こされ、生物学的なメカニズムを通じて作動する。神経生物学の研究成果によると、このような現象は脳によって感覚器官の中で事前に整序されている。つまり感覚が束ねられ構造化されることで、組織内での現象の現前と持続が可能になるのである。神経生物学の水準では、このようにして感情の先駆体（感情の受容体）のようなものが形成される。

ともあれ、われわれの議論において重要なのは、このような先駆体は——言語的にコード化された——感情にとっての必要条件ではないという点である。むしろ感情はわれわれの直接的な体験に属しており、われわれがそれを直接的に名指すことは不可能なのである。むしろ、感情についての言語にとって必要不可欠なのは、他者がそこに関与し得るということ、そして、そのような感情が、われわれの言語共同体における象徴コードによって表現され得るということである。つまり、神経生物学的な現象が、ある明確な「感情」として理解され得るのは、話者がそれを、そのような感情として知覚し、しかも他者がそれを、自ら関与しつつ把握することができるからなのである。感情についての言語が生物学的な現象によって引き起こされ、そこからさらに展開してゆく過程を記述するためには、第一に、両者の視角が生物学的な地平で先行的に形成されることを示し、その上で、第二に、それらの視角が単に生物学的な機能を有するのみならず社会的な意義をも有することが示されねばならない。ゆえにここで記述されるべきは、自然的な素質がどのようにして社会的な機能に形成し直されるのかという点である。それが成功したあかつきには、視角概念によって、生物学的なものと社会的なものとの——直接的ではないにしても——何らかの結びつきが形成されることになるであろう。

感情の現象においては、二人の個人の間が存在する生物学的で对人的な反応を基礎として、「実践上の直観 (praktische Intuition)」が一致するようになる。だが、そこでは同時に、相関的な関係性を基礎として、対峙し合う二つの人称、つまり、感情を抱く Ich と、そこに関与する Du という二つの人称が生まれてくる。言語はまさしくこのような相互性と対峙性への両者の差異化を、両者の間に入って正確に反映させている。

Ich と Du は、ごく幼い頃の感情のやり取りにおいてすでに、単なる入れ替え可能な関係としてのみ対置している訳ではな。A. Berthoz の観察によれば、子供たちはこのような関係性を超えて大人の身体を自分自身の身体図式に適合させることで、積極的に大人の身体との類似性を生み出そうとしている<sup>(5)</sup>。Berthoz はこのような試みを、関与者の振る舞いへの

「感情における類似化 (emotionale Ähnlichung)」と呼ぶ。このような Ich と Du との同一性を生み出そうとする試みは、身体的な模倣の振る舞いを学ぶ際にも観察されようように、ごく幼い子供たちの社会的な振る舞いにとって本質的なものであると思われる。

感情についての言語に関する考察の中でワイトゲンシュタインが用いた表現に即して言えば、子供はそこで感情の「見本 (Muster 型)」を作り出す。このような「見本」は、感情のやり取りに見られる典型的な過程として想定されうるものである。その出発点は、感情表現にある。例えば笑顔。母親が子供の笑顔を受け入れると、母親の顔には「子供の」笑顔が映し出される。さすり合い、密着、愛情あふれる身振り言語といった、愛情表現をめぐる両者の間でのやり取りがますます増えてゆく。子供はこのような諸々の反応を通じて、母親の振る舞いの中に自分自身の姿を再発見する。子供は、母親の笑顔を理解すると同時に、母親の笑顔に映し出された自分自身の笑顔を理解するのである。このような見本を通じて、子供は、母親の感情表現と自分自身の感情表現との相補性や、双方の異なる位置取りを把握してゆく。M. Holodynski によれば、「このような両者の鏡像的な関わりを通じて」、同一の注意の仕方と、それに基づく間主観性が生み出されてゆく<sup>(6)</sup>。

言語を習得する以前の段階で、子供はすでに、感情についての言語にとって重要な条件を満たしている。つまり子供は、他者との共通空間を作り出し、異なる見方をする二つの位置をすでに作り出しているのである。そして子供が、位置を入れ替えるための簡単な規則を習得すると、子供の感情的な振る舞いは、子供と関係する人々によって規制されるようになってゆく。子供は他者とのやり取りを通じて、他者についての実践的な理解を構成してゆくのである。

Ich と Du の位置の構築と、関与的視角の構築を通じて、言語を習得する以前の段階ですでに社会生活の構造化は開始されている。このような構造化を通じて、位置の交換や、再認可能なやり取りの見本が導入されてゆく。このような仕方では異なる位置との社会的な相互作用のみならず、まさに自己固有の見方も成立しうようになってゆく。

このような構造化のプロセスの本質的な前提となるのが生物学的本性である。このような前提はその専門分野において厳

密に記述されている。感情的な現象の他者の現象への作用は、最新の研究においては、ヴァイトゲンシュタインを出発点とする自身の考察の中で示したのと極めて類似した仕方でも詳述されている。例えば、Berthoz/Thiriaux による共感と同情<sup>(7)</sup>、Bastansen 他によるシミュレーション<sup>(8)</sup>、Enicot 他による反映<sup>(9)</sup>、Hemenlotte 他による模倣<sup>(10)</sup>など。

とはいえ、厳密を期すなら、生物学の探求によって達成された成果が——自然科学の研究において行われているのと同様に——象徴的なものの領域にも単純に「連続」し、そのままそこに「適用」され得るなどと主張することは許されない。象徴の世界は、社会的・文化的な刻印を受けており、それは、生物学的なものと同様の直接的な対応物を持たない諸規則によって生み出されるものなのである。とはいえ「少なくとも」、IchとDuの視角や、関与的な視角が、言語空間において再配置されるということは承認されうる。そこで重要なのは、異なる視点や構えを、まったく新しいコンテキストに再配置する新たな組織化なのである。言語によって形成されるすべての象徴的な構築物が、最終的な審級において依拠するのは、かかる新しいコンテキストなのである。ヴァイトゲンシュタイン的な意味で言えば、このようなコンテキストは行為と思考の背景と見なされ得る。ただしそれを問うことは不可能である。

子供と両親とのやり取りの初期の形式は、言語を習得する以前からすでに生じているが、それは依然として社会的に規制されたものではない。社会的な再配置のプロセスについて説明するために、ヴァイトゲンシュタインの言う、感情をめぐる言語ゲームが生じる「根源的な場面」に立ち返ってみよう（子供が怪我をして、泣き叫ぶと、云々）(Pulszta)。子供の「原初的な反応」とは「痛みの見本」(を形成するの)に必要な次のような振る舞いである。子供はそこで生物学的に触発され、社会的に形成された場面「舞台」という枠組みの中に組み込まれる。ここでの俳優は子供と大人である。両者の出会いは偶然ではない。「怪我をした」子供は実際に繋がりと庇護を必要としている。両親は子供の安全に責任を感じている。両者の間には、物理的で社会的な繋がりのみならず、道徳的な義務も生じている。子供は、庇護的な振る舞いを通じて、大人

たちによって切り開かれたコミュニケーションに招き入れられる。ここで重要なのは、子供が、そこでの言葉のやり取りを、自分自身の痛みをめぐる言語ゲームとして捉えているということである。両親にとって子供が傷ついていることは疑いようがない。その光景は両親に仮想的な (virtual) 痛みの感情を引き起こす。これが共感 (Empathie) という反応である。

子供の感情は、言語ゲームの二つの位置に即して直接身体的に把握される。子供にとっては、感情の発現 (Willing) という形で。両親にとっては、痛みの感覚への共鳴、さらには関与的視角に即した言語ゲーム内での出来事として。両親の反応は、感情の言語ゲームに典型的な特徴を示している。両親は、自分たちの行動を通じて、子供を言語ゲームへの参加者として認識し、子供の原初的な反応に、言語ゲーム内での位置づけを与える。子供は、両親の振る舞いや彼らの表情の中に自らの姿を外側から映し出し、自分自身を外側から眺め、さらには両親を (A. Benhoz が言う意味での) 自分自身の「分身 (Double)」と見なす。子供によって経験された痛みと、それに対する両親の確信は、いまや言語ゲームにおいて相補的に関係し合っている。両者は一緒になって Ich と Du という一对の関係性を持続させてゆく。感情的な現象と言語的な現象が、言語ゲームという共通に分有された空間内でのプロセスと化す。

ヴィトゲンシュタインが、感情的な振る舞いの言葉への「置換 (Esetzen)」として記述したものが、感情についての言語の出発点となる。子供はそこで初めて、自己の発現 (Ich-Vollzug) を言葉によって表現することができる。また、子供の感情を捉え関与的な視角をとることができるという両親の能力も、「元をたどれば」彼ら自身の発現にまで遡ることができる。他者の感情を捉える可能性は、人間の身体存在に基礎をもつ。人間の身体は通常、同じ生物学的な機能を備えている。これらの機能が、その都度の文化的コンテクストに応じて類似した反応を引き起こす。身体とは、生物学的な機能と、複数の人間の間で交わされる目に見える振る舞いとが交換される場なのである。負傷した子供が、大人たちによって切り開かれた言語ゲームの空間に招き入れられると、それぞれの参加者たちに割り当てられた役割が機能し始める。関与という仕方

さらには、負傷した子供によって引き起こされた感情的反応の共感的な発現という仕方である。このようなIchとDuとのやり取りのプロセス、さらにはそこで組織化された規制・調整・洗練のプロセスを通して、「自分自身の意識内容に直接的に関わる」「還元不可能な」「自分自身に固有なもの」に対して、言語ゲームの中で表現を与える可能性が生まれてくる。

とはいえ、言語ゲームという理念の根幹にある発想とは、IchとDuとの相互作用において、両者の異なる視角から共通の意味が形成されてくるという点にある。このような共通性を生み出すことが、言語ゲームの役割なのである。それが可能になるのは、話し手 (Ich) が、Duと対峙して関与的な視角を受け入れ、Duの発現を共感的に捉えることができることによる。

Duの位置と、関与的な視角が、Ichによる感情の直接的な体験と、言語ゲームの相手による感情の振る舞いの把握とを媒介する決定的な審級なのである。話者であるIchにとってそれが意味しているのは、Ichが一人称としての権威を有しているが、同時にそれは、二人称の視角のもとで修正されるということである。

感情的な発現そのもの（その言語的な把握ではない）は、このような修正から除外されている。だがIchは、単に自身自身を経験し表現する主体に留まるばかりでなく、自分を理解してもらおうとする言語ゲームの参加者でもある。このことは、Ichを一人称の権威から降格させる第一歩である。Ichが自分自身の感情を他者に対して言語的に分節化する場合、Ichは、自ら外化したものが（他者によって）解釈されうるように配慮せざるを得ない<sup>(11)</sup>。Ichがそれに成功しうるのは、ひとごえに、IchがDuの位置を模倣し、Duの位置を受け入れる場合のみである。ゆえにIchは、自身の発現のみに限定されている訳ではなく、自分を理解してもらおうとする限りにおいて、二人称に対して開かれている。Ichは、IchとDuとの視角の交換可能性を利用して他者の視点から自分自身を見つめ返すのである。

\*

以下では、このような問題から私自身がどのような見解を展開させたのかを簡潔に紹介しようと思う。

現在の私の研究の関心は、「上述のような」共通の意味が形成されるプロセスをどのように捉えるべきかという点にある。確実に言えるのは、子供たちが、感情に関する言語を習得する際、彼らは大人たちから「確乎たる」意味を受け取っているのではないという点である。われわれはこのプロセスを、ひとつひとつ丁寧に記述せねばならない。Vygotskij と Luria の仕事が進むところによると、子供たちは、原初の言語の段階ですでに、極めて一般的なおおざっぱな分節化されていない意味を形成しているようである。

ヴァイトゲンシュタインによれば、意味は使用を通じて生じてくる。このことを、幼い子供における痛みの現象に関する〔上述の〕事例に即して考えてみよう。痛みとは対象ではなく、また観察可能な現象と同じように同定され得る内面の現象でもない。転倒、出血、痛みの感覚、両親の心配そうな表情といった複合的な状況の中に、痛みを持つことの個別的な特徴があるのではない。言語的な反応は、例えば、助け起こしたり、身体をなでたり、抱きしめたりといった諸々の反応が作り出す全体的なコンテキストの中に組み込まれたものである。これらすべてが、子供を落ち着かせ、子供の感情的（かつ生理学的な）状態をふたたび元の状態に戻すのに貢献している。このようにして、子供の外的振る舞いと内的現象が規制されるのである。

規制 (Regulierung) とは、感情に関する言語表現の習得と結びついた極めて重要な過程である。規制とは、子供が、社会において習慣的な感情的振る舞いの見本を形成するようになるプロセスの一部なのである。このような規制に加えて重要な役割を果たすのが、調整 (Abstimmung) である。規制とは両親によるものだが、調整は、子供と両親との共通の行動の中で生じる。調整とは、感情の言語的な把握に組み込まれた決定的に重要な共同作業なのである。(ヴァイトゲンシュタインの例に即して言えば) 転倒した子供は、自分の痛みを感じし、しかも自分の痛みを意識している可能性もある。だが子供は「痛み」という言葉が何を意味しているのか、あるいはそれをどう使用すべきかについては(依然として)知らないのである。

る。

「ヴァイトゲンシュタインは」「痛み」に関する言葉が使用される最初の時期を、曖昧さという言葉で特徴づける。ヴァイトゲンシュタインの哲学を熟知している者なら、ここでの曖昧さが否定的に捉えられている訳でも、低く評価されている訳でもないことを知っていることだろう。言語使用に一義性を要請する場合のみ、このような否定的な評価が下されるに過ぎない。感情についての言語にとって、それは誤った理想なのである。冒頭で述べた通り、感情についての言語とは、対象と（それを指示する）語というモデルで捉えられうるようなものではない。感情とは決して何らかの事象を記述するものではない。ゆえにそれが一義性によって特徴づけられることなどありえない。拙著『ヴァイトゲンシュタインの人間学的思考』の中で、私は、感情に関する言語の記述を、比喩的な言語使用の特殊例と見なすことを提案した。以下では、この提案をさらに展開してみようと思う。

感情に関する言語の初期段階を支配している言語使用の曖昧さは、幼い子供が、膨大な数の連想を相互に結びつけることによって生じている。子供は、自分自身の感情的な状況との関わりで生じる現象のすべてを相互に結びつけてしまう。ゆえにここでの曖昧さが意味しているのは、連想の結びつきの充溢〔過剰〕なのである。まさにこのような充溢が、連想のネットワークとして脳内に蓄積されてゆく。これはまさに、脳が機能する仕方に厳密に対応している。このような〔感情の言語の〕展開の初期段階においては、子供は依然として、大人たちが交わす言葉の中で用いられるような分節化された意味を形成してはおらず、彼らは単に曖昧な見本を形成しているに過ぎない。つまりここでは、極めて多岐にわたる連想が、その形象の輪郭が認識され得るようになるまで相互に結びつけられてゆく。形象の輪郭は、両親と子供との間でなされる規制と調整のプロセスを経て描かれてゆくのである。

ここでは以下の3点が重要である。

(一)「感情の言語の」展開の第一段階において重要なのは、子供の生活の中で、輪郭が、つまり一般的な見本が形成されることである。これらは行為を通じて形成される。つまりそれは規制のプロセスを通じて形成される。輪郭が充填される方は極めて多様である。最初に用いられる痛みの表現は、「あぁ」「痛い」といった直接的で表情豊かな叫びと類似しており、Duに対して直接的に訴えかけてくるような表現である。

(二)子供が痛がっている状況においては、輪郭を充填するのに用いられる様々な連想の可能性が存在している。その可能性の中から最終的に選び出されるものが、両親と子供に共通の言語使用の中で形成されてくる。実際に使用されるのは、様々な連想の可能性の中のごく一部なのである。このような様々な連想の可能性が脳を構造化し、後にそれらが活性化されて想起されることにもなるのだが、「選択されなかった」膨大な数の連想は、もはや脳の中で活性化されなくなってしまう。つまり多くの構造が、もはや使用されなくなることで、多かれ少なかれ衰微してゆくのである。

(三)両親と子供との間での調整のプロセスは一方的になされるのではない。それは両親から子供への一方通行の伝達ではない。むしろ、様々な調整の状況の中で、様々な意味が共同で形成されてゆく。ここで重要なのは、両親が子供に教えるという、指導と習得のプロセスなのではない。むしろ、両親だけではなく、子供も、原初的言語の第一段階で生じる意味を構築している。むしろ、初期の段階においては、両親が子供の言葉に合わせて、「イタイイタイなの？」といった原初的な表現を使用する。両親と子供との一対一の関係においては、実に多くの特殊な言語使用が生まれてくるものである。ともあれこのことは、両親にとって積極的な効果を持っている。つまり両親たちは「それを通じて」充溢した状況に「ふたたび」参画することになるのだ。彼らはそこで、抑圧された無数の連想を（ふたたび）享受することになる。

子供が大人になると、このような原初的な言語形式は退行してゆく。だが、わたしの主張の展開にとって重要なのは以下の点である。つまり「前述の通り」IchとDuとの調整の第一段階においては、連想による言語の充溢が生じてくるが、この充溢は確かに後の段階で慣習的な言語によって覆い隠されてしまうが、それが完全に消え失せてしまうことはないという

点が重要なのである。このような状態を、無数の連想の宝庫を活用する比喩的言語のための準備段階と見なすことができる。

『脳と詩』という啓発的な書物の中で、Roual Schrott と Arthur Jacobs は、比喩を、「個々人の生によって描き出された声の輪郭」と捉えている<sup>(12)</sup>。そこでは詩的な言語使用が、意味が「固定されていないもの」として特徴づけられる (ebd., S. 187)。比喩とは開放であり、読者によって埋め合わせられるべき広大な空地を作り出す。比喩は記憶を流動化させ、それによって記憶は、模倣的に、感覚的な経験や印象の想起に駆り立てられるのである。

比喩によって「まずは、それまで未知であった類似性が開示される。比喩はそれによって、あるものを別のものの眼差しの下で眺め把握するという、創造的で認知的な行為、つまり〈als ob 構造〉を遂行する」(S. 192)。このような主張はむしろ、何ら新しい洞察と言えないものではない。だがそれは、以下の二つの補足を追加することで、極めて新しい価値を獲得することになる。

(一) 比喩は、〈E. G. 構造〉を用いて、生の過程で生み出された初期の連想の充溢を再活性化させ、これらの連想を、声の輪郭を充填するために利用する。これらの初期の連想は、完全に消え去ってなどいないのだ。初期の連想が作り出す構造は詩的言語の中でよみがえり、これらの認知的・感情的な潜在力が、いまやより高度に展開された地平において利用されるようになる。これは単に詩にのみあてはまるのみならず、感情に関する言語にもあてはまる。例えばわれわれは、突然のひらめきを、「それは稲妻のように彼を貫いた」といった言葉で表現する。一瞬にして恋に落ちる事態を、落雷によって表現することもある。「稲妻の一撃」。愛の稲妻。「胃がねじれる」。これは胃のむかつきの表現である。「ずたずたに引き裂かれる」。これは深い失望の表現である。

感情に関する日常言語において決して珍しくないこのような比喩の輪郭は、数々の連想によって充填される。詩人の言葉

においては、このような無数の連想がまさしく増幅されているのである。詩人の言葉においては、日常言語からのわずかな逸脱も生じているが、決定的に重要なのは、そこでは新しいコンテクスト化が生じているということである。「彼は自分を知っているが、彼は他者を信じてもいる。この矛盾が彼を真つ二つに切り裂く」(フランツ・カフカ)

(二) 比喩とは、二つのものを直接的に比較することではない。SchrottとJacobsに即して言えば、比喩とは、二つのものを「比較のための第三項のもとで間接的に」相関させることを意味する。そして「彼らによれば」このような第三項は、「比喩に」[:]深みを与えるベクトル」を生み出す(S. 196)。二つのものが「離れていなければならないほど、その第三項に対して、より大きな余地が与えられることになる」(S. 197)。私はこのような、比喩に「深みを与え」、離れた事物を結びつける「ベクトル」とは、身体のことなのではないかと考えている。むしろこのような仮説は、すべての比喩に当てはまるものではなく、感情的な内容をもつ比喩にのみ当てはまる。

このプロセスは以下のように記述されうる。感情は、内面と外面を有している。すべての心身に関わるプロセスがこのような二面性を有しているが(例えば、病氣、幸福、不幸など)、感情に特有なのは、外面にあらわれる現象のすべてが、内面を、つまり感情についての内的で身体的な経験を指示しているという点である。

カフカは、切り裂くという「外的」行為を、「彼」、つまり「自己を知ること」と「他者による判断を信じていること」での緊張を生きる人物と関係づける。「彼」は、このような内的緊張を、矛盾として体験している。(知ることと信じてることとの)「認識論的な構え」に見られる内的矛盾が、引き裂くという形象「比喩」によって外的行為に転換されているのである。それに続けて内面に回帰する運動が生じる。つまり「外的な」引き裂くという行為が、彼の内面に映し出される、つまり「彼」(カフカが語る人物)の内面で、何かを負うのである。そして読者がそれを読むことを通じて、読者の内面に、切り裂くという記述によって引き起こされた共感的な感情が生まれてくる。

比喩は、痛みに関して身体的に感じ取られるこのような内的共鳴を発動させる。負傷による痛みに対する身体的な共感

は、「深みを与えるベクトル」なのだ。読み手が抱くのは、比喻によって表現された痛みではない。それはまったく別ものである。むしろそこでは、切り裂くという「外的」運動によって連想された内的傷が、読者のうちに共鳴を引き起こし、三つに切り分けられたカフカの一文を、途方もなく印象的な比喻と化しているのである。

まさに感情に関する言語と同じように、詩人と読者の間にも、IchとDuとの関係が形成されている。むしろそれは、子供とその両親との関係とは異なる仕方では機能する。だが、詩人と読者の間にも、「声の輪郭」としての言葉があり、それが読者に「連想の」可能性の充溢を開放し、読者のもとで抑圧されていた状況をふたたび活性化させる。読者の内にこのような可能性を再活性化させ、それをよみがえらせ、それを読者に新たに経験させることこそ詩人の役割なのである。SchroffとJacobsが述べる通り、詩人は読者に、自身の詩によって生み出した「言葉の仮面を着せる」(S. 331)。読書とは「感性的な経験でもあるのだ」(S. 39)。

私が最後にこのような注意を書き添えたのは、読者の皆さまに、分析的に進められた以上の議論を通じて、美学の位置づけが獲得されうることを示すためである。美学的なテキストも、IchとDuという一対に基づいている。「美学的なテキストをめぐる」IchとDuとの相互作用を通じて、「言語ゲームにおける」位置や視点の交換可能性、自分の身体に生じる他者の感情に対する共感的な共鳴、比喻による感情の言語的把握、さらには、失われてしまった過去の感覚の可能性を再生することが可能になる。

- (1) Emilie Benveniste, „Die Struktur der Personenbeziehungen im Verb“, in: ders., *Probleme der allgemeinen Sprachwissenschaft*, München 1974 (frz. 1972), 251-264.
- (2) Im Folgenden stütze ich mich insbesondere auf folgende Titel von Ludwig Wittgenstein: *Philosophische Untersuchungen* (PU, 1953), in: *Werkausgabe in acht Bänden, Bd. 1*, Frankfurt a.M. 1984; *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie* (BPP), in: *Werkausgabe Bd. 7*, a.a.O.; *Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie*, Bd. 1, (LS I) in: *Werkausgabe Bd. 7*, a.a.O.; *Über Gewißheit*, (ÜG) in: *Werkausgabe Bd. 8*, a.a.O.; *Last Writings on the Philosophy of Psychology: The Inner and the Outer. Vol. II (1949-1951)* (LS II). Oxford 1992.
- (3) Im Folgenden knüpfe ich an meine Wittgenstein-Interpretation an (siehe *Wittgensteins anthropologisches Denken*, München 2009, Kap. 7) und führe sie weiter.
- (4) Jaak Panksepp, *Affective Neuroscience. The Foundations of Human and Animal Emotions*, New York/Oxford 1998.
- (5) Alain Berthoz: *La décision*. Paris 2003.
- (6) M. Holodynski, *Emotionen – Entwicklung und Regulation*, Heidelberg 2006.
- (7) A. Berthoz/B. Thirioux: „A spatial and perspective change theory of the difference between sympathy and empathy“, in: *Paragana* 19,1 (2010): *Emotion – Bewegung – Körper*, 32-61.
- (8) J.A.C.J. Bastiaansen u.a.: „Evidence for mirror systems in emotions“, in: *Physiological Transactions of the Royal Society*, 364 (2009), 2392-2404.
- (9) P.G. Enticott u.a.: „Mirror neuron activation is associated with facial emotion processing“, in: *Neuropsychologia*, 46 (2008),

2851-2854.

- (10) A. Hennenlotter u.a.: „The Link between Facial Feedback and Neural Activity within Central Circuitries of Emotion – New Insights from Botulinum Toxin-Induced Denervation of Frown Muscles“, in: *Cerebral Cortex*, 19 (2009), 537-542.
- (11) Vgl. D. Davidson: „Wissen, was man denkt“, in: ders.: *Subjektiv, intersubjektiv, objektiv*, Frankfurt a.M. 2004 (amerikan. 2001), 62.
- (12) R. Schrott / A. Jacobs: *Gehirn und Gedicht*, München: Hanser 2011.